
 書 評

できる！傾向スコア分析 SPSS・Stata・R を用いた必勝マニュアル

康永秀生ほか 著

今は Evidence Based Medicine (EBM) の時代であり、発表や論文に何らかの統計解析は必須と言ってよい。しかし、今の統計ソフトは或る意味恐ろしい。とりあえずデータを放り込めば、何らかの結果が数字として出てくる。それが、自分の仮説を援用する結果だと「統計学的に有意です。」と意気揚々と発表する。

論文は Reviewer がいるのでそれほどひどくはないが、学会発表ではどう見ても共線性や独立性を無視しているだろうというロジスティック解析や、オッズ比の信頼期間がゼロマタギで「それは言い過ぎじゃないの？」というのが横行している。

特に外科系は、シャム手術を人間でやるわけにはいかないし、ランダム化比較試験 (RCT) は行いにくく、以前はせいぜい case control 研究で、エビデンスレベルの高い研究が難しかった。そこに現れたのが疑似 RCT ともいえる傾向スコア分析である。

何でもかんでも傾向スコア分析の生嚙り濫用があつというまに学会発表で激増した。子供が新しいおもちゃに喜々としているみたいだ。

仮にもデータベース解析にかかわる身として「ステロイドの出現に興奮濫用して副作用だらけ」と同じにならなきゃよいがと心配していたところに、この本である。まさに「待ってました！」と快哉を叫びたいところである。

特に理論編が素晴らしく、盲を開かれる思いがする。特に数式が最小限なのは臨床家にはありがたい。

適切に傾向スコア分析を適用するための条件と限界が、サンプルデータを具体的に援用しながら

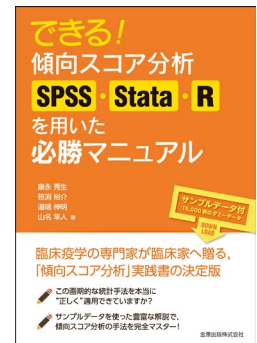
解説してあり、初めて傾向スコア分析しようとする初心者には必読であろう。

またマッチングだけでなく、逆確率による重みづけ (average treatment effect, average treatment effect on the treatment) による傾向スコア・マッチングの結果の頑健性 (robustness) について理論編・実践編両方で触れていることは、従来の解説本にはない特徴だろう。

私には SPSS しか経験がないため、実践編は、Stata や R の部分を論評する能力はないが、SPSS に関してはきわめて懇切丁寧であり、実際の SPSS の画面が添えてあるため、本に書いてある手順のとおりによれば必ず結果が得られるであろう。それゆえ、まずは理論編を理解したうえで、実践編を読んで欲しい。

ないものねだりをすれば、実践編には記載してあるが、重回帰分析と二項ロジスティック解析の違いさえ理解してない臨床家が多数いることを踏まえて、それらについても理論編で解説していただくか、あるいはシリーズ化してほしいというのは望みすぎであろうか？

いずれにせよ臨床研究を志す者にとって、机上に常に置いておくべき一冊であろう。



西野仁樹 (国立病院機構相模原病院)
〔金原出版, 本体 3,200 円〕